

## 手話-日本語同時通訳における論旨の伝達

白澤 麻弓

(筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)

KEY WORDS: 手話通訳 読み取り通訳 論旨の伝達

## 1. 目的

聴覚障害者による発信機会の増大にともない、手話を日本語に翻訳して伝える手話-日本語同時通訳（いわゆる読み取り通訳/以下、通訳）へ期待が高まりつつある。

白澤（2016 a,b）は、研究会場面における通訳分析から、必ずしも研究会という場面に応じた言い回し（レジスタ）が用いられていないこと、また全体的な訳出率は高くても、学術的に重要な言い回しにおいて誤訳が発生したり、限定表現や程度を表す表現に伝達の誤りが生じたりしていることを指摘している。

一方、通訳上のずれや誤りの中には、こうした語彙や形態素レベルのものだけでなく、論理展開や論旨の伝達といった、より大きな単位のものも含まれているものと考えられる。そこで、本研究では学術的な講演場面における通訳を取り上げ、論旨の伝達に注目してその詳細を分析することで、本分野における手話通訳者の養成・研修に寄与することを目的とした。

## 2. 方法

複数の通訳者が同一の素材を基に通訳を行っている様子を収録し、比較的的分析することで、各通訳者の訳出の特徴を明らかにした。具体的な手順は以下の通りである。

1) **映像素材の収集**: 日常的に手話を用いて学術的な活動を行っている聴覚障害者1名（40代女性）に依頼し、映像素材の収録を行った。テーマは、「米国における聴覚障害学生支援と日本の課題」であり、約15分間の収録映像のうち、論旨の流れが明確で、かつ話者の意図がはっきりと伝わってくる箇所（約6分間）を抽出し、映像素材とした。

2) **通訳データの収集**: 映像素材を基に、7名の通訳者（A~G）が通訳を行っている音声を、ICレコーダーにて収録し、通訳データとした。いずれの通訳者に対しても、映像素材はプロジェクタとスクリーンを用いて通訳者の正面に提示し、これを見ながら手話から日本語への通訳を行っていただいた。収録にあたっては、事前にスライド資料を提供して、準備を行っていただくとともに、映像素材の冒頭1分間を提示し、話者の手話や話の流れを把握したうえで、残りの5分間を通訳する形とした。収録は同一素材で2回行い、2回目を分析対象とした。

なお、対象となった通訳者は、いずれも厚生労働大臣認定手話通訳士資格を保有し、学術分野における手話通訳については5年以上の経験を有していた。また、映像・音声の収録に際しては、目的・使用方法を説明し同意を得た。

3) **分析方法**: 収録した通訳データを基に、トランスクリプトを作成し、以下の分析を行った。

① **訳出率**: 霍間(2014)を参考に、原文を節単位に区切り、それぞれの内容を伝達する上で重要な語句（重要語句）を各3~4個選択するとともに、これらすべてが伝達できていて、意味内容に過不足がないものを「完訳」、重要語句のいくつかは抜け落ちているが、概ね意味内容が伝わっているものを「減訳」、原文にない情報が伝わっているものを「加訳」、それ以外を「訳出なし」として判定した。

② **加訳・減訳の分類**: 上記において加訳・減訳と判定された箇所の中には、語句レベルで訳出に過不足があるものから、論旨に影響を与えるものまでさまざまな内容が含まれ

ていた。したがって、これらを「訳出の過不足」「論旨のずれ」「接続関係の違い」等、6つに分け出現頻度を分析した。

③ **論旨の伝達状況**: 映像素材の中で伝えられている論旨を抽出し（23個）、各論旨の通訳者ごとの伝達状況を4段階で判定した（「非常に適格」「適格」「論旨にややずれが見られる」「論旨に誤りがある」）。

## 3. 結果

いずれの通訳者も訳出率は90%以上だったが、通訳者によって加訳・減訳の割合が異なり、多い通訳者で約50%となっていた（表1）。うち、3名の通訳者に5箇所以上の論旨のずれが含まれており、「ややずれが見られる」と判定された箇所が通訳者ごとに最大8か所、「誤り」と判定された箇所が最大2箇所あった。また、ほとんどの通訳者が前半の論旨1~6では正確な通訳ができていたが、論旨7以降、表2に示すようなずれや誤りが出現する傾向にあった。

表1 通訳者ごとの訳出率（単位：箇所/全32節）

	A	B	C	D	E	F	G
訳出率	100%	96.9%	93.8%	100%	96.9%	100%	93.8%
完訳	17	20	16	22	23	31	28
減訳	15	11	14	10	9	1	2
加訳	0	0	3	0	0	0	0

表2 論旨のずれ/誤りの例

よりの確な 訳出の例	論旨のずれ/誤りを 含む訳出の例	備考
ただ、大学3年生になるとゼミが始まります。そうなったときに、すぐ行き話つてしまふんです。	ところが、3年生、4年生になると、ゼミが始まるとなる、その専門的な内容では、筆記による文字による通訳では十分ではないんですね。	受け身的な学習では限界がある→専門的な内容には対応できない
つまり、自分が受けるという立場から、主体的な行動をする時において、手話通訳というものはとても大事な存在になるわけです。	つまり、自分自身が受け身ではなく、主体的に学業に、え~参画していくという、その活動が非常に大事になってきますね。学年が上がってくると。	手話通訳の重要性→主体性の重要性

## 4. 考察

本研究の結果、学術分野における通訳経験豊富な通訳者の場合、全体的な訳出率は非常に高く、訳出できない場面はほとんど生じないが、論旨のずれを含む通訳上の過不足は少なからず生じていること、通訳者によっては、その割合が比較的高いことが明らかになった。また、前半の事実を述べている箇所では適格な訳出が多く、話者の価値を含む発言以降、ずれや誤りが生じていたことから、原文の内容と論旨の伝達に何らかの関係性があることが示唆された。

## 5. まとめ

本研究では、手話から日本語の通訳を分析することで、通訳者による論旨の伝達状況を明らかにした。正確な通訳は、学術分野で活躍する聴覚障害者を支える上で非常に通訳な要素であり、今後より詳細な分析を行うことにより、養成・研修に繋がる知見となるものと考えられる。

付記: 本研究は科学研究費助成事業（基盤研究A/課題番号26245086）の成果である。研究実施にあたっては、筑波技術大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号: H28-31）。(SHIRASAWA Mayumi)